

アメリカの  
今を讀む

外交ジャーナリスト・作家  
Ryuichi Teshima

## 手嶋龍一

「Change」を合言葉に大統領選挙を勝ち抜いたバラク・オバマ氏が、米国民と世界中の熱い期待を担って大統領に就任、新政権が発足した。米国史上はじめての黒人大統領が誕生した背景やオバマ政権の今後について、外交ジャーナリストの手嶋龍一氏に話を聞いた。

バラク・オバマ氏が、第44代アメリカ合衆国大統領に就任しました。

米国史上初の黒人大統領誕生——日本では単純にそう見られがちですが、背景はそれほど単純ではありません。アメリカの黒人には二つの系譜があつて、かつての奴隷をルーツとする人々と、移民の子孫にあたる人々がいます。前者と後者の間にはいまだに見えない高い障壁があり、社会的に「隔離」されているのが現状です。ケニアからの留学生であつた父と中産階級の白人の母との間に生まれたオバマ氏は、明らかに後者に属しているのです。

しかし彼は大学を出るとすぐ、あえて黒人の最貧層が住むシカゴのサウスサイドに赴き、黒人コミュニティに溶け込みました。麻薬と暴力と売春にまみれたこの街で、やがて彼はオーガナイザーとして頭角を現すのです。バラク・オバマは、その「生まれ」によってではなく、自らの意志によって、真の意味での「黒人政治家」になった。そこに彼の本質があるのです。

04年のポストンでの民主党大会において、基

りました。しかしそうした人種差別的な反発自体が、むしろこの青年政治家を鋼のように鍛え上げ、大統領選にプラスに働いたといえるかもしれません。

共和党のマケイン候補を圧倒して大統領選を勝ち抜いたオバマ氏は、アメリカの理念である「法の下の自由と平等」が単なる建前でなく、現実となったと、高らかに宣言しました。一方で、ブッシュ政権が推し進めた「一国主義」の結果、アメリカは同盟国の信頼までも失う情勢になっていきます。さらに、選挙戦のさなかに深刻化した、自国発の経済危機。オバマ氏は自分の肩にかかる責務の重さを、ひしひしと感じているに違いありません。

## 世界市民の大統領として

こうした現状の中で、オバマ氏は大規模で大胆な経済政策を発表しました。とりわけ目を引くのが、「グリーン・ニューデール」とも呼ばれる、代替エネルギー分野への投資です。環境対策にはむしろ消極的だったこれまでの政策を一転させ、

## オバマ政権とは何か

調演説の大役に抜擢されたオバマ氏は、白人も黒人もヒスパニックもない「統合された（ユナイテッド）アメリカ」を主張しました。その言葉が強い説得力を持ったのは、彼のこうした出自の背景があつたからにはかなりません。

当時無名の地方議員であつたバラク・オバマの名を、一躍全米に、いや世界中に知らしめたこの演説を僕は現場で直接聞き、久々に力強い「アメリカの歌」が聞こえたと感じました。以来、彼には深い関心を払ってきたのです。

## 鍛え上げられた黒人政治家

ヒラリー女史と争つた大統領予備選は、女性と黒人、いずれも従来のタブーに挑戦する候補同士の一騎打ちとして関心を集めました。僕はかなり以前から、アメリカ社会がタブーを打ち破り、大統領に「女性と黒人」を受け入れる準備はできていると見ていました。ただヒラリー陣営は、「女性の時代」到来を見極めきれずに準備が遅れたことが敗因となるだろうとも予測していました。

2000年の大統領選で黒人のコーリン・パウエル氏（後の国務長官）が立っていれば、初の黒人大統領が誕生していた可能性があります。しかし、狂信的な人種差別主義者による暗殺を強く危惧したパウエル夫人の意向もあつて立候補することもなく、実現はしませんでした。

もちろんオバマ氏にも暗殺の危険はついてまわ

その内容はいへん先進的でチャレンジングなものとなっています。

こうしたオバマ政権を、たとえば経済政策は〈保守主義〉傾向、安全保障は〈日本軽視〉といったかつての民主党政権の延長線上でとらえるのは、おそらく正しくないと思います。

世界でアメリカの地位の低下を主張する人は多く、僕もそれを否定はしませんが、しかしなおアメリカの動向が国際政治・経済を大きく左右することは間違いありません。その大国の舵をとるべく登場したオバマというまったく新しいタイプのリーダーを、僕は「われら世界市民の大統領」と呼んでもいいのではないかと思うほど、期待をもつて見えています。

もちろん、何でもアメリカの言うなりになれという意味ではありません。それどころか、従来のようにアメリカの「お天気次第」のような対応を続けていては、それこそ一部の人が恐れているような「ジャパン・パッシング」の事態にもなりかねません。

バラク・オバマ新大統領の「Change」の流れにうまく乗りつつ、これまでの日本に足りなかった主体性を、いかに発揮できるか。たとえば「グリーン・ニューデール」についても、環境技術に優れた日本がイニシアティブをとれる部分は少なくともいはずです。オバマ政権と対等の関係を作れるリーダーシップを、日本の政治にもぜひ期待したいものです。

（談）